

2016 年度大学院進捗報告会

2016 年 3 月 16 日(木)・17 日(金)

F 号館 104 教室

(1 日目) 3 月 16 日(木) 15 : 30~17 : 15

(2 日目) 3 月 17 日(金) 10 : 00~16 : 10

発表スケジュール

注意と認知 3/16(木) 15:30~17:151

| | |
|---|---|
| 15:30~15:45 仲 早苗 D2 片山ゼミ | |
| 課題に対する反応方略と課題難度が妨害効果に及ぼす影響 | 1 |
| 15:45~16:00 林 朋広 M1 佐藤(暢)ゼミ | |
| 微細な変化を含む環境下でのラットの経路追従における脳梁膨大後部皮質損傷の影響の検討 | 1 |
| 16:00~16:15 中野 麻里花 M1 浮田ゼミ | |
| 姿勢が注意の焦点の範囲に与える影響についての検討 | 1 |
| 16:15~16:30 椎木 泰華 M1 米山ゼミ | |
| 発達障害児の書字技能に対する応用行動分析を用いた指導の効果 | 1 |
| 16:30~16:45 小國 龍治 D1 大竹ゼミ | |
| 強みとポジティブな共感が主観的幸福感に及ぼす影響 | 2 |

態度・コミュニケーション 3/17(金) 10:00~12:00.....3

| | |
|--|---|
| 10:00~10:15 西村 友佳 M1 小川ゼミ | |
| 潜在的道德態度の変化に対する魅力的な顔の効果 | 3 |
| 10:15~10:30 中村 早希 D1 三浦ゼミ | |
| 複数源泉から複数方向の説得場面における態度変容プロセスの解明 | 3 |
| 10:30~10:45 荒岡 茉弥 M1 米山ゼミ | |
| 自閉スペクトラム症児における金銭管理に関する研究 | 3 |
| 10:45~11:00 山本 亜実 D1 小野ゼミ | |
| 大学生における対人関係カウンセリング (Interpersonal Counseling: IPC) の有効性の検討 | 4 |
| 11:00~11:15 杉原 聡子 研究員 米山ゼミ | |
| 発達障害のある子どものペアレント・トレーニングにおける集団ビデオ・フィードバックプログラムの開発の試み | 4 |
| 11:15~11:30 大塚 拓朗 D3 片山ゼミ | |
| 隠匿情報検査における隠蔽に関連する心的過程の検討 | 4 |

感情・パーソナリティ 3/17(金) 12:45~14:305

| | |
|------------------------------|---|
| 12:45~13:00 山岸 厚仁 D3 佐藤(暢)ゼミ | |
| 援助行動の神経メカニズム | 5 |
| 13:00~13:15 久須美 沙紀 M1 中島ゼミ | |
| 質問紙調査による飼い主および飼い犬の性格関連性検討 | 5 |

| | |
|--|----------|
| 13:15～13:30 伏田 幸平 D2 片山ゼミ | |
| 身体的魅力がひきつける注意は刺激の物理特性の影響ではない | 5 |
| 13:30～13:45 文 瑞穂 M1 米山ゼミ | |
| 発達障害児に対する社会的強化の効果検討に関する研究計画 | 5 |
| 13:45～14:00 植田 瑞穂 D2 桂田ゼミ | |
| 幼児期における他者のポジティブ情動に対する共感発達過程の検討 | 6 |
| こころの健康 3/17(金) 14:40～16:10..... | 7 |

| | |
|------------------------------|---|
| 14:40～14:55 吉岡 映理 M1 桂田ゼミ | |
| 同性愛・両性愛者のカミングアウトによる心理的効果について | 7 |
| 14:55～15:10 栗林 千聡 D1 佐藤(寛)ゼミ | |
| ジュニア選手の競技不安に対する認知行動療法 | 7 |
| 15:10～15:25 齊藤 由佳 D3 小野ゼミ | |
| 双極性障害患者における簡易な個人心理教育 | 7 |
| 15:25～15:40 竹谷 怜子 研究員 小野ゼミ | |
| 教員のメンタルヘルスと QOL について | 7 |

■発表形式

- ・発表者は、1人15分(発表12分、質疑応答3分)の発表の後、30分の全体討論を行います。
- ・全体討論では、まずセッション内の発表者で互いの発表について議論(約10分)を行った後、フロア全体から質疑を受けます。発表者は、セッション内の発表者同士の議論において、同一セッションの2つ後ろの発表者に必ずコメントをしてください。
- ・各セッションには、3~4人の先生にフィードバックコメントをお願いしております。セッション終了後、発表者に先生方からのコメントをお渡しします。

■参加について

- ・2016年度進捗状況報告会は誰でも参加可能です。事前連絡は必要ありません。参加される方には、会場でお名前と所属のご記名をお願いいたします。

■発表内容の口外禁止のお願い

- ・本発表には、共同研究のものや、今後予定されている調査・実験の内容が含まれているものがあります。発表の詳細が分かるような内容の口外はお控えください(SNS等での口外も含みます)。

■学部生の今後の調査・実験の参加について

- ・学部生(特に、総合心理科学科の学生)は、本発表に関する調査や実験の対象者になる可能性があります。進捗報告会に参加された学部生の方は、今後、発表者の調査・実験の参加にできない可能性があることをご了承ください。

■懇親会はありません

- ・懇親会等は今のところ予定しておりません。会場には飲み物とお菓子を用意しております。ご自由にご飲食ください。お菓子を食べてディスカッションを盛り上げましょう。

注意と認知 3/16(木) 15:30～17:15

コメント担当：小川先生，桂田先生，嶋崎先生，米山先生

15:30～15:45 仲 早苗 D2 片山ゼミ

課題に対する反応方略と課題難度が妨害効果に及ぼす影響

課題無関連な刺激の処理について，呈示時間を弁別する課題を用いて実験を行った。課題関連情報である刺激の呈示時間や刺激への反応方法，課題難度を操作し，無関連刺激による関連刺激の処理に対する妨害効果および無関連情報に対する ERP を比較した。その結果，高難度課題の呈示時間の短い刺激に対しては妨害効果が小さくなるが，注意に関する ERP である P3 が惹起されたことから，無関連刺激による不随意的な注意捕捉だけが妨害効果の要因ではないことが示唆された。

キーワード：妨害効果，P3，視覚

15:45～16:00 林 朋広 M1 佐藤(暢)ゼミ

微細な変化を含む環境下でのラットの経路追従における脳梁膨大後部皮質損傷の影響の検討

卒業研究からラットの脳梁膨大後部皮質 (restrosplenial cortex ; RSC) が自動的に学習した経路を走行する行動に関与している可能性を示唆した。そこで，本研究では RSC を損傷したラット (損傷群) と偽損傷を行ったラット (偽損傷群) を用い，一つの経路の学習をさせた後その道中に微細な変化を加え，両群の行動の差を検討した。RSC が学習した経路を自動的に追従することに関わっているのであれば，偽損傷群は道中の微細な変化にとらわれず既習の経路を走行し，損傷群は自動的な経路の追従ができず環境の変化に引きずられ偽損傷を行ったラットとは異なる行動パターンを示すと予想した。結果としては，卒業研究と同様に，経路の学習に関しては損傷，偽損傷の間に差は見られなかったが，小さな環境の変化を与えた際に偽損傷群と比べ，損傷群が既習の経路から多く外れた行動が観察された。このことから RSC の経路の追従は環境の変化に影響を受けたことが示された。

キーワード：脳梁膨大後部皮質，ラット，空間認知，経路学習，脳損傷実験

16:00～16:15 中野 麻里花 M1 浮田ゼミ

姿勢が注意の焦点の範囲に与える影響についての検討

感情が注意の焦点の範囲の広さに与えることが従来の研究で示されてきた。しかし，Harmon-Jones, Gable & Price (2013) は感情価に関わらず，動機づけの強さが注意の焦点の範囲の広さに影響を与える可能性を指摘した。また，Price & Harmon-Jones (2011) は姿勢が動機づけの強さを操作することを報告した。このことから，姿勢が注意の焦点の範囲に影響を与える可能性が考えられる。そこで，本研究は姿勢が注意の焦点の範囲の大きさに影響を与えるかどうか検討した。

キーワード：姿勢，身体化認知，注意

16:15～16:30 椎木 泰華 M1 米山ゼミ

発達障害児の書字技能に対する応用行動分析を用いた指導の効果

発達障害児などの子どもに対する書字の支援方法を検討した研究，特に応用行動分析を用いた研究はあ

まり多くないのが現状である。そこで、私が行う研究では療育を利用している子どもの書字技能に対して、応用行動分析を用いた指導方法の検討を目的とする。認識可能なひらがなを書くことができるが、枠から字がはみ出してしまう男児 1 名に対して、枠の中にひらがな 1 文字をはみ出さずに書くことを標的行動とした研究の進捗を報告する。

キーワード： 自閉スペクトラム症，書字技能，応用行動分析

16:30～16:45 小國 龍治 D1 大竹ゼミ

強みとポジティブな共感が主観的幸福感に及ぼす影響

本研究では、大学生を対象に強みとポジティブな共感が主観的幸福感に及ぼす影響を検討した。その結果、強みの認識と強みの活用感、ポジティブな共感、主観的幸福感はそれぞれ正の関連をしていた。重回帰分析の結果、強みの活用感とポジティブな共感、主観的幸福感の高さに影響を及ぼすことが示された。これらの知見が強みとポジティブな共感に対して持つ意味について論じたい。

キーワード： 強み，ポジティブな共感，主観的幸福感

態度・コミュニケーション

3/17(金) 10:00~12:00

コメント担当：片山先生，佐藤(寛)先生，中島先生

10:00~10:15 西村 友佳 M1 小川ゼミ

潜在的道德態度の変化に対する魅力的な顔の効果

Wang et al. (2015) は，魅力的な他者の存在によってポジティブ感情が生起し，道徳的な行動が引き出されることを示唆した。では，魅力的な他者の存在は潜在的な道德態度にも影響するのだろうか。本研究では，魅力的な女性の画像が連続呈示されることで潜在的な道德態度が変化するかどうか検討した。実験では，魅力的な女性の画像が 100 回連続呈示される前後で潜在的な道德態度と気分状態を測定した。潜在的な道德態度の測定には潜在連合テスト (Implicit Association Test, IAT) を用いた。気分状態の測定には簡易気分評定尺度である日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) を用いた。実験の結果，潜在的な道德態度とネガティブ気分は魅力的な女性が連続呈示された後で弱くなったが，これらの変化に相関関係は見られなかった。このことは魅力的な女性の顔を反復呈示することで，気分の変化とは独立して潜在的な道德態度が変化したことを示唆している。

キーワード：Facial attractiveness, moral, IAT

10:15~10:30 中村 早希 D1 三浦ゼミ

複数源泉から複数方向の説得場面における態度変容プロセスの解明

博士論文の研究の目的は，説得の 2 過程モデルをベースに「複数源泉」から「複数方向」に説得される場面での被説得者の態度形成・変容のプロセスを明らかにすることである。説得の 2 過程モデルは被説得者の態度形成・変容のプロセスを説明する主要な理論であるが，複数の源泉から複数方向に説得を行う状況があまり考慮されていない。本発表では，複数源泉・複数方向の説得における態度形成・変容のプロセスの解明の第一段階として，この説得場面でにおいても 2 つの異なる態度形成・変容のプロセスに区別できるという説得の 2 過程モデルの仮定が支持されるかを検討した，2 つの実験について紹介する。

キーワード：態度形成・変容，複数源泉・複数方向，説得の 2 過程モデル

10:30~10:45 荒岡 茉弥 M1 米山ゼミ

自閉スペクトラム症児における金銭管理に関する研究

過去の調査から障害のある子どもがいる家庭に対して金銭教育の必要性や取組み状況について尋ねた結果，多くの保護者が金銭教育を必要と回答しているものの，実際に取り組めていないといった現状がある。こうした調査から，金銭教育の必要性は高いと考えられるが，その方法論については未だ明確でない。よって，金銭管理や計画的支出における指導方法の開発に関する研究を行いたいと考え，その計画について発表する。

キーワード：発達障害，自閉スペクトラム症，応用行動分析，金銭管理

10:45～11:00 山本 亜実 D1 小野ゼミ

大学生における対人関係カウンセリング（Interpersonal Counseling: IPC）の有効性の検討

2016 年度から、IPC の大学生の抑うつ状態に対する効果の臨床研究を、ストレス対処方法、前頭前皮質活動、ADHD 傾向を考慮しながら行っている。研究デザインは、単盲検・準無作為化・検証レベル（対象者数 70 名）の通常のカウンセリング（counseling as usual : CAU）との比較対照試験とした。6 月に関西学院大学人を対象とする行動学系研究倫理委員会による承認を得た。現在までに IPC 群で 5 名、CAU 群で 7 名のデータを得た。報告会では、これらの結果について発表する。

キーワード：対人関係カウンセリング， Interpersonal Counseling (IPC) ， 抑うつ状態， ADHD

11:00～11:15 杉原 聡子 研究員 米山ゼミ

発達障害のある子どものペアレント・トレーニングにおける集団ビデオ・フィードバックプログラムの開発の試み

発達障害のある子どもへの支援と並行して行われる家族支援の 1 つに、ペアレント・トレーニング（以下、ペアトレ）がある。海外発の配信型プログラムの普及も進む現在、国内ではなお来談型の集団式プログラムが各機関で実施されており、対象者に応じた様々なプログラムの考案がなされ一定の成果が報告されている。ただし、従来のプログラム検討では、保護者の知識の獲得と心理・健康面の改善に関する効果検討が主となっており、それらの維持効果や実践スキルの獲得・一般化に関する効果検討の報告はまだ少ないのが現状である。また、段階的なプログラムやペアトレ指導者の不足及び費用対効果の問題などが課題となっている。平成 27 年度より、関西学院子どもセンターで実施しているペアトレの現状について報告し、ペアトレ課題の整理と解決に向け考案した集団ビデオ・フィードバックプログラムの実践経過について報告する。

キーワード：ペアレント・トレーニング， ビデオ・フィードバック， 発達障害

11:15～11:30 大塚 拓朗 D3 片山ゼミ

隠匿情報検査における隠蔽に関連する心的過程の検討

隠匿情報検査は、特定の事件事実に対する弁別的反応の有無をもとに、検査対象者が事件に対して認識を有しているか推定することを目的としている。弁別的反応の生起機序は定位反応(Sokolov, 1963)の枠組みで説明される一方、メタ分析では隠蔽に関連する心的過程が弁別的反応を修飾している可能性が示唆されている。博士論文は、その修飾様式を実験研究で明らかにし、既存の理論を精緻化することを目的としている。発表ではこれまでにを行った実験を概観する予定をしている。

キーワード：隠匿情報検査， 隠蔽， 弁別的反応， 定位反応

感情・パーソナリティ 3/17(金) 12:45~14:30

コメント担当：浮田先生，大竹先生，三浦先生

12:45~13:00 山岸 厚仁 D3 佐藤(暢)ゼミ

援助行動の神経メカニズム

困難に陥った他者を助ける行為は援助行動と呼ばれ，社会生活を円滑に営む上で重要な役割を果たしている。援助行動の生起には他者への共感が必要であると考えられているが，共感の神経基盤と援助行動の関係については十分に解明されていない。この問題を解決するため，本研究では齧歯類を対象として援助行動の神経メカニズムの解明に取り組んでいる。今回の報告会では，①社会行動の制御に関わるオキシトシンが援助行動に及ぼす影響，②援助行動の獲得に伴う神経細胞活性の変化，③共感に関わる脳部位である前部帯状皮質ニューロンの活性化が援助行動に及ぼす影響について報告する。

キーワード：援助行動，共感，ラット，オキシトシン，前部帯状皮質

13:00~13:15 久須美 沙紀 M1 中島ゼミ

質問紙調査による飼い主および飼い犬の性格関連性検討

本研究の目的は，飼い主と飼い犬の性格に類似性をはじめとした何らかの関連がみられるかどうかを検討することである。検討にあたり，ヒトとイヌの性格を測定可能な共通の尺度が必要となるため卒業論文研究にて，平芳 (2005) が抽出したイヌとヒトいずれにも使用できる性格表現語から 15 語を選出し，イヌ・ヒト一般性尺度(CHOPS)を作成した。本研究では飼い主と飼い犬の性格関連性を検討するため，CHOPS を用いイヌを飼育している家庭およそ 120 世帯を対象に質問紙調査を実施し結果について考察した。

キーワード：質問紙調査，パーソナリティ

13:15~13:30 伏田 幸平 D2 片山ゼミ

身体的魅力がひきつける注意は刺激の物理特性の影響ではない

身体的魅力がひきつける注意は刺激の物理特性の影響を受けているかを検討した。参加者は男女それぞれ 12 名であり，3 刺激オッドボールパラダイムを用いて家画像 (12%) と異性画像を呈示した。異性画像は高/低魅力画像がそれぞれ低頻度 (12%) もしくは高頻度 (76%) で呈示された。刺激に対する ERP は刺激が倒立呈示された際は魅力や頻度の違いが認められなかったが，正立呈示された際は高魅力刺激に対する反応が大きかった。よって，身体的魅力がひきつける注意は刺激の物理特性の影響を受けていないと考えられた。

キーワード：身体的魅力，事象関連脳電位，注意，画像刺激

13:30~13:45 文 瑞穂 M1 米山ゼミ

発達障害児に対する社会的強化の効果検討に関する研究計画

応用行動分析において，行動に継続して刺激を呈示し，その行動の反応率や生起率を増大させるものを正の強化という。とりわけ社会的強化は人と人との相互作用の中で表れるものであり重要だと考える。

しかしながら発達障害をもつ者に対する社会的強化の効果はあまり研究されていない。そこで発達障害を持つ児童に対して社会的強化がどのように機能するかを検討したいと考え、それを目的とした研究計画を発表する。

キーワード：社会的強化，応用行動分析，発達障害

13:45～14:00 植田 瑞穂 D2 桂田ゼミ

幼児期における他者のポジティブ情動に対する共感発達過程の検討

ポジティブな感情に対する共感について、人生早期におけるその発達過程を検討することを目的とした。

1, 2 歳児を対象に、母親や実験者が複数のポジティブな状況に関する演技を行い、子どもの反応を測定した結果、「達成の演技」のみに対する情動的共感や賞賛行動が1歳から2歳にかけて増大することが明らかになった。さらに、このような他者の達成状況に対する共感の発達に影響する要因として、子どもの達成経験や被賞賛経験、母親の養育態度などの効果を検討した。

キーワード：幼児，発達，共感，ポジティブ情動，達成経験

こころの健康 3/17(金) 14:40～16:10

コメント担当：小野先生，佐藤(暢)先生，成田先生

14:40～14:55 吉岡 映理 M1 桂田ゼミ

同性愛・両性愛者のカミングアウトによる心理的効果について

同性愛・両性愛の人が自身の性的指向を打ち明ける「カミングアウト」にどのような心理的効果があるのかを検討することを目的とした研究を行おうと考えています。現段階では，質問紙を作成して当事者に答えさせ，カミングアウトの程度(誰にしたか，何人にしたか等)によって心理尺度の得点に違いがあるのかどうかということ，また一般の人とは違いがあるのかどうかということを明らかにしていこうと考えています。具体的な質問項目，またそれ以降の研究内容について現在考え中ですので，アドバイスをいただきたいです。

キーワード：同性愛，カミングアウト

14:55～15:10 栗林 千聡 D1 佐藤(寛)ゼミ

ジュニア選手の競技不安に対する認知行動療法

ジュニア選手の代表的な心理的問題の一つに競技不安が挙げられる。過度な競技不安は生活上のストレスや怪我のリスクを高めるなど，ジュニア選手の競技生活に不利益をもたらすことが知られている(Smith et al., 2000)。ジュニア選手の競技不安はその後の競技生活に対してネガティブな影響を与える危険性があることから，有効な予防的対策が必要な喫緊の課題であると言える。しかしながら，ジュニア選手の競技不安に対する現場で応用可能な知見は極めて不足している。そこで，①ジュニア選手の競技場面における認知を測定する尺度を開発し，信頼性と妥当性を検討すること，②競技不安に対する認知行動療法プログラムを開発することを本研究の目的とする。

キーワード：ジュニア選手，認知行動療法，自己陳述，競技不安

15:10～15:25 齊藤 由佳 D3 小野ゼミ

双極性障害患者における簡易な個人心理教育

本研究の目的は，双極性障害における簡易な個人心理教育の有用性の検討である。患者と心理専門職または薬剤師がテキストを読み合わせるという簡易な個人心理教育を実施することにより，患者の疾患理解度，疾患や治療に対する認識にどのような変化が現れたかを評価した。また，将来心理教育などの心理的介入に関わる職務に就く可能性が高い大学生での双極性障害の認知状況を調査し，治療の必要性の認識に関わる因子の検討を行った。

キーワード：双極性障害，心理教育，疾患理解，治療の必要性の認識

15:25～15:40 竹谷 怜子 研究員 小野ゼミ

教員のメンタルヘルスと QOL について

教員のメンタルヘルスの低下が危惧され，教員の Quality of life (QOL) の低下が推察される。そこで，教員の QOL および自殺への考え方の現状と，メンタルヘルス改善法を探索的に調査するため，小・中・高

等学校教員を対象に4つの研究を行った。その結果、教員の役割/社会的 QOL が低い可能性が示唆され、教員の自殺への正しい理解には役割/社会的 QOL 向上が必要である可能性が考えられた。また、「新型うつ病」教員への対人関係カウンセリング的介入の有用性が示唆された。

キーワード：QOL, メンタルヘルス, 教員